



20日は「春分の日」。太陽は真東から昇り真西に沈み、昼と夜の時間が12時間と等しくなる。が、あくまで太陽が点で、地球に大気がないと仮定した時の天文学の話。実際は日の出と日の入り時刻が太陽の最上縁で定義され、また大気の屈折率が水平面より下方にある物体（太陽）を浮き上がらせる効果で、昼間が約10分程度長くなる。

この日を境に北極点では半年ぶりに太陽が顔を出して地平線上をぐるっと巡り始め、また北極圏以北では半年先の秋分まで沈まない「白夜」

2017.3.19.



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

春分の日

となる。逆に南極点では太陽は秋分まで現われない。ちなみに春分では札幌では47度、水戸では54度、那覇では64度と南ほど高く昇り、赤道で90度となる。すべては地球が球で自転軸が傾いているからだ。

このところの肌寒さで控えていた散歩を再開。田んぼのあぜ道に緑の濃いセリを見つけた。顔を近づけると独特の香味が漂う。ふと百人一首の「君がため 春の野に出でて 若菜摘む 我が衣手に 雪は降りつつ」を思い出した。当時、雪をかぶったセリも摘まれたのだろうか。

雪が降るといえば、水戸での終日の平年値は3月14日だが、最も遅かった記録は2010年4月17日。最高気温の推移は平年で2月下旬は9.9度、3月下旬は13.0度と徐々に暖かくなっていくが、実際の春は寒暖を繰り返す訪れる。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

2017.3.26



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

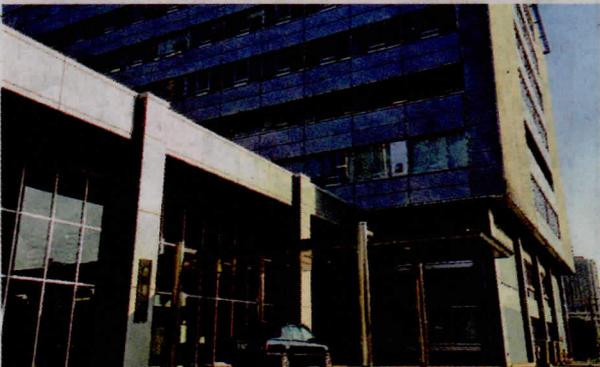
気象庁

して、アメリカに次ぐ第2位の分担金を拠出。「ひまわり衛星」や「太平洋台風センター」の運営などのほか、ジュネーブのWMO本部にも専門スタッフを派遣している。

気象庁は地方ブロック機関として、札幌、東京、大阪などに「管区气象台」を置く。各県に設置された「地方气象台」には30人程度の職員が常駐し、観測や予報のほか、気象注・警報などを行っている。また「アメダス」「気象レーダー」「ひまわり衛星」「漂流ブイ」海底ケーブルを利用した「地震・津波計」などによる観測、さらに飛行場でも航空気象の観測や予報を行っている。

これらの仕事のほとんどすべては自動的に行なわれており、特にスパコンを利用した天気予報の精度は世界屈指で、テレビや新聞で見られる天気予報の基礎となっている。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



気象庁=東京都千代田区

2年近く連載したコラムも今回で終了となった。ご愛読頂いた読者に感謝したい。最終回は気象庁を簡単に紹介する。

創立は1875（明治8）年の「東京气象台」にまでさかのぼる。最初の天気予報は明治17年。「全国一般 風ノ向キハ定リナシ 天気ハ変リ易シ 但し雨天勝ち」と極めて漠としていた。現在の気象庁は国土交通省の外局、約5千人の職員と約700億円の予算で、気象や海洋、地震の観測や予測などを365日24時間体制で行っている。一方、「世界気象機関（WMO）」の一員と